

Title	カント宇宙論の根底と超越論的理性の冒険：批判哲学形成史への非学問的序説の試み
Sub Title	Kants transzendentes Denken in seiner Kosmologie
Author	小松, 光彦(Komatsu, Mitsuhiko)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1978
Jtitle	哲學 No.67 (1978. 3) ,p.49- 64
JaLC DOI	
Abstract	Kants Begriff des Transzendentalen ist gemeinhin als eine Art Schlüsselbegriff seines Denkens verstanden worden. Dieser Begriff wurde nicht erst in der kritischen Epoche Kants geboren, sondern ist während seines ganzen Lebens allmählich gereift und charakterisiert den Gang des Kantischen Denkens im Ganzen. Der Verfasser des vorliegenden Aufsatzes versucht erstens zu zeigen, dass das Charakteristische für Kants transzendentes Denken, d. h. eine Art Zwiespaltigkeit schon in der Kosmologie des jungen Kants aufgetreten ist und zweitens zu skizzieren, wie die Wirkungen dieses zwiespaltigen Denkens durch das ganze Philosophieren Kants hindurch bis in die kritische Epoche fort dauerten. In Allgemeine Naturgeschichte und Theorie des Himmels (1755) versuchte der junge Kant aus dem kontemplativen Gesichtspunkt die Leibnizsche, teleologische Metaphysik mit der Newtonschen, mechanistischen Physik zu verknüpfen. Aber er konnte mit seinem kühnen Versuch keinen vollständigen Erfolg haben. In dieser kosmologischen Abhandlung gibt es das unverkennbare Schwanken des Kantischen Denkens zwischen seinem Mechanismus und seiner Teleologie. In Traume eines Geistersehers (1766) tritt diese merkwürdige Zwiespaltigkeit als die Zweiheit der Welten, d. h. die Trennbarkeit der materiellen Welt von der immateriellen auf. Und im Verhältnis der letzteren zur ersteren erscheint das Leben, dessen einer Teil das menschliche ist. Zuletzt, in der kritischen Epoche, machte das doppelte Schwanken des Kantischen Denkens die Antinomienlehre der Kritik der reinen Vernunft (A 1781, B 1787) aus.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-0000067-0049

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

カント宇宙論の根底と超越論的 理性の冒険

—— 批判哲学形成史への非学問的序説の試み ——

小 松 光 彦*

Kants transzendentes Denken in seiner Kosmologie

Mitsuhiko Komatsu

Kants Begriff des Transzendenten ist gemeinhin als eine Art Schlüsselbegriff seines Denkens verstanden worden. Dieser Begriff wurde nicht erst in der <kritischen> Epoche Kants geboren, sondern ist während seines ganzen Lebens allmählich gereift und charakterisiert den Gang des Kantischen Denkens im Ganzen.

Der Verfasser des vorliegenden Aufsatzes versucht erstens zu zeigen, daß das Charakteristische für Kants transzendentes Denken, d. h. eine Art Zwiespältigkeit schon in der Kosmologie des jungen Kants aufgetreten ist und zweitens zu skizzieren, wie die Wirkungen dieses zwiespältigen Denkens durch das ganze Philosophieren Kants hindurch bis in die <kritische> Epoche fort dauerten.

In «Allgemeine Naturgeschichte und Theorie des Himmels» (1755) versuchte der junge Kant aus dem kontemplativen Gesichtspunkt die Leibnizsche, teleologische Metaphysik mit der Newtonschen, mechanistischen Physik zu verknüpfen. Aber er konnte mit seinem kühnen Versuch keinen vollständigen Erfolg haben. In dieser kosmologischen Abhandlung gibt es das unverkennbare Schwanken des Kantischen Denkens zwischen seinem Mechanismus und seiner Teleologie.

In «Träume eines Geistersehers» (1766) tritt diese merkwürdige Zwiespältigkeit als die Zweiheit der Welten, d. h. die Trennbarkeit der materiellen Welt von der immateriellen auf. Und im Verhältnis der letzteren zur ersteren erscheint das Leben, dessen einer Teil das menschliche ist.

Zuletzt, in der <kritischen> Epoche, machte das doppelte Schwanken des Kantischen Denkens die <Antinomienlehre> der «Kritik der reinen Vernunft» (A 1781, B 1787) aus.

* 慶應義塾大学文学部助教授 (倫理学).

カントの批判哲学は、その主題と方法から一般に超越論的哲学と呼ばれている。しかしこの「超越論的」(transzendental) ということの意味するものは、決して一義的ではない。カント自身がこの語を用いる場合でさえ、伝統的な意味とカント独自の批判的意味とが交錯しており、それらを解きほぐすのは容易なことではない。したがって批判期カントにおける超越論的哲学形成の錯綜した過程それ自体を直接解明することは、むしろ本稿の到底望みえぬところである。この小論が試みようとするのは、晩年に至ってはじめて滔々たる大河にまで成長したカントの生涯を貫く思索の流れに合流していったであろう数知れぬ支流のうちの一つ二つを探ってみることにすぎない。まずさしあたりわれわれの目指す支流の名は、一七五〇年代自然哲学に没頭していた若きカントの関心を最も強くとらえていた宇宙論的問題、cosmologia transscendentalis である。

1.

一七五五年、まだ三十代の青年カントは『宇宙の一般自然史および理論』⁽¹⁾の中で、当時ヨーロッパ学界の最尖端をいくニュートン力学の方法に鼓舞されつつ若さにまかせて大見得を切った。曰く、「われに素材を与えよ。しからばそれからひとつの宇宙を組立てて進ぜよう！」⁽²⁾と。これだけでは、誇大妄想患者の狂言ともうけとられかねない不遜な言葉のように聞こえるかもしれない。カント自身そのことは十分承知していたとみえて、この著作をいきなり次のように書き起こしている。「わたしは一つの主題を選んだのだが、それはその問題自身の中にある難しさによっても宗教との関連においても同様に、最初から読者の大部分に敵意ある偏見をもってうけとられかねないようなものなのである。」⁽³⁾「わたしにはなるほどこれらのあらゆる困難が十分わかるけれども、それだからといってひるむことなく…思いきって危険な旅を敢行した。そしてすでに新天地の岬を望見しているのである。」⁽⁴⁾ここには並々ならぬ覚悟と自信がうかがわれる。決して気紛

れな妄想や奇を衒う Sophistik とは思えぬひたむきさがある。この著作を導いている中心的動機は、テキストの表現にみるかぎり、「最高存在者の直接の御手がそこに認められるような諸結果を、それ自体に委ねられたままの自然に、敢えて帰することが許される⁽⁵⁾」かという問題をめぐり、一方の側の「宗教の擁護者」もしくは「篤信家」と他方の側の「自然主義者」ないし「自由思想家」との論争である⁽⁶⁾。言い換えれば、「あらゆる秩序と美とを備えた宇宙」の生成についてのライプニッツ的な神学的・目的論的説明とニュートン的な自然主義的・機械論的説明との対立の問題、もっと一般化して言えば、キリスト教神学的宇宙観と近代自然科学的なそれとの対決という問題である。しかもこの場合、たがいに相容れない二つの立場の対立として表現されていることは、実は同時にカント個人の内面的葛藤を反映したものであるのであって、それゆえに当時のカントにとってたんなる一つの理論上の問題にとどまらない切実な意味をもっていたのである⁽⁷⁾。このような二つの相矛盾する立場がカント自身の思想の中に流れ込んだ経緯については、これまで一般に、一方が家庭教育および学校教育を通じての Pietismus の影響に、他方が大学において修得された数学的・物理学的知識に帰せしめられている⁽⁸⁾が、ここではこの問題にこれ以上触れないでおく。

ところで『宇宙論』においてカントが試みている問題の解決方法は、要するに、宇宙についてのニュートンの・機械論的説明とライプニッツ的・目的論的説明とを宇宙全体に対する超越的観照者の視点から整合的につなぎ合わせるというものであった⁽⁹⁾。しかしその場合、通常考えられるように両者を適当な仕方で折衷することによってではなく、この著作の副題「ニュートンの原理によって論じられた全宇宙構造の体制と力学的起源についての⁽¹⁰⁾試論」が示すように、むしろ前者の徹底的遂行を通じてかえって後者の可能性を証明しようとするところに青年カントの独創性と若々しい野心がうかがわれる⁽¹¹⁾。すなわち、かれはここでニュートン力学の方法をニュー

トン自身よりもいっそう徹底的に宇宙生成論に適用することを企て、その
ような純粹に機械論的な説明を可能にするまでに秩序整然たる「宇宙界の
ひとつの体系的体制」(eine systematische Verfassung des Weltbaues)⁽¹³⁾
を見いだすことによって、その背後に、「宗全性の計画」という「最高の
叡知的意図」を推論しようとするのである。⁽¹⁴⁾ けだし「自然は〔その原初の〕
カオスにおいてすら規則的で整然たる行動をとるほかはないという、まさ
にこの理由から神は存在する」⁽¹⁵⁾と結論づけられるのである。しかし『宇宙
論』におけるこのようなカントの方法を支えているひとつの重要な前提が
見落とされてはならない。無限に多様な現われをもった宇宙の全体を整然
たる秩序と調和のうちに構成されてゆくものとして観照しうるためには、
どうしても宇宙の生成全体を見通しうる宇宙界の中心点に視座を定めなけ
ればなるまい。前述の「われに素材を与えよ云々…」という言葉が発し
るのは、このような位置に立つ者を措いて他にありえない。また、「最高の
根源的存在者の満足に必然的に一致するような被造物の全総括」⁽¹⁶⁾は、その
ような「最高の根源的存在者」自身の視点からのみ可能であるといわなけ
ればなるまい。後述するよう⁽¹⁷⁾に、カントはこれらのいずれも、有限者とし
ての人間に許されるものではないことを十分承知している。それにもかか
わらず「対象の強い魅力と、一つの理論が最大限にまで拡張されて一致を
示しているのを見るというわれわれ自身の満足」⁽¹⁸⁾のゆえに、かれは敢えて
この限界を踏み越え、方法的にはあるが、無限者としての神の視点に立
とうとするのである。しかしかれをこのように人間的経験の制約を超越す
る方向に衝き動かしているものは、決してたんなる知識欲もしくは理論的
関心だけではなく、人間の精神をよりいっそう高貴な驚嘆へ高めうるとか
れ自身が確信するところのものでもある。「晴れた夜に煌めく星天を見る
ならば、われわれは高貴な心のみが感ずる一種の満足を与えられる。あま
ねくゆきわたった自然の静寂と感官の安らぎのもとで、不滅の精神の隠さ
れた認識能力は、言い表わしえぬ言葉を語り、解きあかしえぬ概念を与え

る。それらは感じられはするのだが、叙述することはできぬのである。⁽¹⁹⁾」
『宇宙論』の結語のうちにあるこの文章には、この時期のカントにとって自己の思想的葛藤の究極的解決の可能性を暗示するかのようにも感じられたであろう静謐な境地が吐露されている。このような境地こそ、青年カントが自己の人間的・経験的視点と日常生活世界への視角とを犠牲にしてまでも求めてやまないものだったのである。かれの思想的発展史においてこの時期が一般に「独断論的」と評されるゆえんである。しかしこの「独断のまどろみ」のうちこそ、われわれは後年の批判哲学体系構築の原動力となった超越論的理性の生き生きとした胎動を読みとることができるように思うのである。

ともかく、相互に対立する両極の間を動揺しながら究極的な安定と調和を求めるカントの思考の特性は、この宇宙論だけにとどまるものではない。それは一種独特のいわば「カント的両極性」⁽²⁰⁾として、かれの生涯にわたる哲学的思索を貫いて響きつづけ、幾多の曲折と変容を経ながら批判期哲学体系のうちにもまでおよんでいる。たとえば、『純粹理性批判』の「超越論的弁証論」における「純粹理性の二律背反」を扱った章の中の一節では、前述の相互に対立する二つの宇宙論的立場が、一方の側の道徳と宗教に対する理性の実践的関心に好都合な「独断論」(Dogmatismus)と他方の側の理性の理論的関心にとって有益な「経験論」(Empirismus)との二律背反的対立として⁽²¹⁾、また哲学史上におけるプラトン主義とエピクロス主義との対立として⁽²²⁾定式化されている。そして三十年前に青年カントの心をとらえていた宇宙論的論争は、「第四の二律背反」として「はたして一つの最高の宇宙原因が存在するのか、それとも自然の諸事物およびそれらの秩序が、われわれが自分のあらゆる考察においてそこで立ちどまらざるをえぬ究極的対象をなすのか」⁽²³⁾というように定式化されているのである。しかしここで述べたいと思うのは、その思想内容そのものについてではない。この例に示されたようなカントの思想的・学問的営為を支える基本的モチー

フの驚くべき持続性の背後にひそむカント自身の意識のありよう、否、むしろカントというすぐれて近代的な意識に仮託した人間精神の冒険と挫折、飛翔と墜落のドラマを見つめてみようと思うのである。

2.

十六、七世紀のヨーロッパにおいて人間精神はその思考の枠組と型とを一変する深刻な革命を経験したというのが定説になっている。⁽²⁴⁾ この精神の転回の内容についてはこれまで様々な視角から叙述され、論じられてきているが、いずれにしても、最終的には十八世紀の啓蒙主義を特徴づける徹底した機械論的世界観にまで到りつくこの精神革命が近代科学および近代哲学の根であり果実でもあることは疑いえない。A. Koyré はこの十七世紀革命がもたらした古い世界観から新しい世界観への構造変化を「閉ざされた世界から無限の宇宙へ」という基本線においてとらえ、さらにそれをコスモスの崩壊と空間の幾何学化という相互に関連しあう二つの基本作用に還元した。完全性と価値の階層構造によって美的なまでの完璧さをもって秩序づけられた有限な全体としての世界は、この革命を通じて、突極的・基礎的成分（素材）と一定の法則によってのみ統一された無際限の同質的延長としての無限の宇宙へと拡散したのである。⁽²⁵⁾

折しもこのように大きな思想的転回が完遂されようとしていた時代に、青年カントの精神は目覚め、はばたきはじめていたのであった。若々しく妥協を知らないイーカロスの翼はすでに開かれつつあった可能的思考究間を一気に昇りつめ、たちまちその限界を向う側に突き抜けてしまう。「世界というシャボン玉は大きくふくらんでからはじけ、まわりの空間に呑みこまれた」(Koyré)。ヨーロッパ的精神が未だかつて経験したことの無い無底の深淵、パスカル的とも呼びうるであろう無限の奥行。ひとたびこの虚空に震撼され眩暈を覚えた精神は、もはやあの啓蒙主義的理性の Optimismus に再び立ち還ることはできない。このような精神には、安住の地を失なっ

てさまよいつづけるあの「永遠のユダヤ人」の像が重なりあう。以来、人間カントの意識の中では、一方の、生理的身体性に媒介され諸感覚の調和によって構成された日常生活世界と、他方の、無限の憧憬に焼き尽され妥協なき知的自由を求めてニュートンの絶対空間・絶対時間を天翔ける精神の境界との間を結ぶ糸は断ち切られてしまったのである。しかしかれは前進する。不敵にも蜘蛛に変身して自ら虚空にそれを紡ぎ出そうというのである。むろん退路はとくに断たれていた。両界の間の気の遠くなるほどの懸隔に口を開いた奈落。この Krise (裂け目・危機) において自失し墜落するのを免れる方法はあるだろうか。活路はただ一つ。この途方もなく隔たった両界を同時に視野に収め、瞬時にして一方から他方へと跳び移りつづけることである。それは極度に研ぎ澄まされた意識による巨大な振幅の、休まない振子運動によってのみ可能であろう。「Melancholiker カント」⁽²⁶⁾の軽妙な機知と諧謔⁽²⁷⁾の秘密が実はカント伝の記者たちも見抜くことのできなかつたこの乾坤一擲の跳躍にあるのだと言ったら、あまりに身勝手な臆測にすぎるであろうか。一般に「懐疑論的時期」と評される一七五〇年代の終り頃から六〇年代のカントの思想的境涯をこのように解釈する余地はないであろうか。もし以上のようなことが幾らかでも事実だったとしたら、その想像を絶する緊張と振幅に耐えることは、おそらく未だ人間の意識が経験したことのない苛酷な拷問であったに違いない。それでもなお分裂と崩壊を免れることのできた人格とは、やはり度外れて強靱だったのか、さもなければひとつの奇跡としか言いようがない。一匹の蜘蛛に身を変じて恐ろしいミーノータウロスの顎^{あぎと}の間に宙吊りになり、まぎれもない狂気の迷宮を彷徨しながらも正気の世界に通じるアリアドネーの糸を自前で紡ぎつづけた、したたかな思索の騎士をそこに見る思じいがする。あの思考の大伽藍とも評される Kritische (危機的・批判的) Philosophie の体系に結晶した論理的 Architektonik (建築術) も、その陰に秘められた熾烈な実存的苦闘という視角から見直されるとき、いささか異なった相貌を

呈するのではあるまいか。少なくとも、ヴォルフ哲学に代表されるドイツ啓蒙主義の堅固な砦を後にして以来実に四半世紀におよぶ、前人未踏の精神の闇を往く孤独な冒険行がそこに隠されていることは疑いない。ちなみに、いわばカント自身の狼疾記とも評されるべき異色の哲学的エッセー『視靈者の夢』(1766)⁽²⁸⁾は、外見上の軽妙な文体にもかかわらずその到る処に魑魅魍魎に取り囲まれた理性の悪夢と孤立無援の苦闘の痕跡をとどめており、全篇にわたって苦渋にみちた逡巡と屈折した両義性の ironisch な表現に彩られている。

どうも話がいささか上滑りしすぎたようである。本稿ではカントのたえまなく動揺する意識の根底にある思考の両極性に焦点を絞り、その展開の跡を素描するにとどめたい。紙数の関係で幾分図式的になるが、発生史的順序にあまりこだわらずに全体の輪郭を辿ってみることにする。

3.

カントにとって世界は、まず経験的レベルにおいて、日常生活世界(常識の世界)と非日常的知識世界(学問の対象としての世界)とに二分されて意識される。かれは一般に前者を pragmatisch (実用的)、後者を metaphysisch (形而上学的)と呼んでいるようである。もとよりこれら二つの世界はそれ自体として二元的に実在すると考えられているわけではなく、理性を具えた生物としての人間の重層的存在構造に由来するものと考えられている。つまり、それらの世界は、たとえば物質と精神というように存在者の異なる二つの領域を意味するものではなくて、人間自身の二つの異なる活動方向——カントはこれを Absicht (意向)と呼んでいるように思われる——に基いて現われてくるものなのである。ここで注意すべき点は、単純に前者を実践、後者を理論ないし知、と解してはならぬということである。一般に理論と呼ばれるような認識活動も一つの Absicht に基くかぎり、やはり広義の実践(人間的営為一般)のうちに含まれる、つまり、

その主体的責任を問われるのである。真の知はこれら狭義のいわゆる理論と実践とを包括するものでなければならない。このことは後に批判期に至って、「実践理性の優位」という明確な定式化を得る。このような考え方においては、今日もなお依然としてさまよいつづけている亡霊、「学問のための学問」とか「芸術のための芸術」とかいうような甘えの可能性は徹底的に排除されていると言ってよい。カントは「独断のまどろみ」のうちにあった過去の自分をも含むそのようなエゴイストで自惚れ屋の知識人を、痛烈な皮肉をこめてキュクロプス（一眼巨人）と呼び、嘲笑して⁽²⁹⁾る。健全な Weltbürger（世界市民）は悟性に加えてさらに理性の自己認識という第二の眼をもたねばならないと考えられる。カントにとって Aufklärung ということの真の意味は、このことだったのである。

しかしこのような方向に認識が深められていくなれば、理性は決して経験的レベルのうちにとどまっていることはできない。人間の存在構造はそれ自体としてみれば決して安定した堅固さをもっていない。むしろその基盤はきわめて脆弱で不安定なものである。もしそれが真相であるとするならば、われわれの経験しうる世界は唯一絶対のものであるどころか、かえってまったくの偶然的仮象にすぎないであろう。人間が宇宙の中心に位置して最も公平に世界を観照しうるという幸福な神話は、ラディカルな認識活動自体によって微塵に砕け散ってしまった。形而上学的高揚の極致ともいべき先の『宇宙論』の中で、青年カントはいちはやくこの冷厳な実相を見抜いている。「諸天体の居住者について」と題された箇所では、引力と斥力との相互作用に関する力学的理論に基いて、宇宙を構成する力の中心から物理的に遠ざかるほど宇宙構造そのものに対する知が増大するという注目すべき思想が展開されている。「〔この太陽系内に居住する〕もろもろの思惟的本性〔つまり、諸種の知性体〕の完全性の全範囲は、それらの居住位置の太陽からの距離に比例してそれらがよりいっそう優れまたよりいっそう完全になるという一定の法則に従う⁽³⁰⁾」のであるから「地球と火星と

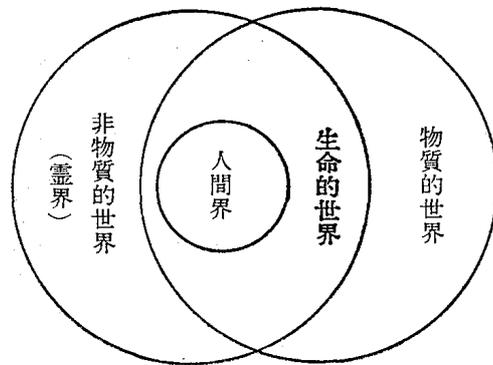
いう二つの惑星の住民はその物理的性質〔つまり、身体構造〕においても道徳的性質においても、〔それらの性質の完全性に関して〕二つの極点間の中間位置にある⁽³¹⁾ことになる。しかしその位置は「より低い等級を越えて精神を一定の高さに高めはするけれども、同時に精神をそこから再び無限の奈落へ墜落させうるような」「無力と力との危険な中間点」⁽³²⁾なのである。容赦ない理性の眼でかれはこう言い切っている。だがそれにしても「不死の魂が……その未来の持続の全無限にわたって、いったい宇宙空間のこの点、このわれわれの地球に常に固着したままでいるというのであろうか？……われわれがここに滞在するように指定されている時間がすっかり経過し終わった後に、われわれに他の天体で新しい住居を用意するために、おそらく惑星系のなお若干の球体が形成されるであろう……」⁽³³⁾と、こともなげに言っているカントの宇宙意識は、夙に人間的経験のレベルを超越し、超越論的レベルへ抜け出たのである。

4.

経験的意識に出現した先の二つの世界をつなぐ糸は、この未踏の超越論的意識の領野に求められなければならない。日常生活世界——『自然地理学』『人間学』『美と崇高の感情についての観察』の系列——と知識世界——自然および道徳の形而上学の系列——とに共通の根底を問ひ、両界の結び目を探求する Weltweisheit (世界知・哲学) の冒険行がここに始まる。ここからは地上につなぎとめられた狭義の「人間的」視点を超越することになる。

『視霊者の夢』第一部第二章においては、視霊者スウェーデンボルグへの関心に誘発されたいわば幻視的形而上学の透視術を通じて、そのような超越論的探索が行なわれている。それによるとこの超越論的レベルでは、物理的本性の世界(物質的世界)と霊的本性の世界(非物質的世界・霊界)という相互に類比的な構造をもつ二つの純粋な世界が分離して現われる。

前者は引力と斥力という相互に反対方向にむかう基本作用の組合わせによって構成され、後者はそれらに対応する愛と尊敬（畏怖）という基本作用によって構成されている。前者はニュートンが論証したような機械的作用法則（必然の法則）に従っているのに対して、後者は自発的・能動的・目的論的・自己決定的な靈的作用法則（自由の法則）に従っているのである。これら二つの純粋な世界はそれぞれ完結した体系性をもっているが、それらが相互に重なりあう部分にいわゆる生命的本性——心と身体との統一としての人格もその一種と考えられる——の世界（生命的世界）が現出する。そしてこの生命界の一部を成す人間界を構成する基本作用は、美と崇高という二つのすぐれて人間的な感情として表わされるのである。生命界では物的存在者が物質的世界における非物質的存在者（靈）の作用の媒体となっているがゆえに、有機的作用法則が支配しているのである。（第1図参照）。このようなわけで、われわれの経験している人間界とは、あたか



〔第 1 図〕

も重ねあわせた二枚の色異なるガラス板を透過した光線のように一見すると一様な同質性をもっているようで、実は透徹した超越論的理性の眼からみれば、相互に無限に隔った二つの異質な世界の中の暗闇に映し出されたひとつの Erscheinung (幻) にすぎない。そしておそらく、その闇が濃いほどに映像もいっそう鮮明に見えるのである。「それゆえ人間の心というものは、現世の生活においてすでに、同時に二つの世界と結びついてい

るものとみなさなくてはなるまい。心は身体と結合して人格的統一をなしているかぎり、それら二つの世界のうちの物質的世界だけをはっきりと感覚する。それに対して心が靈界の一成員として非物質的本性の純粋な影響を受けて、その結果身体との結合が解かれるや否や、心と靈的本性との間に常に存する共同関係だけが残る、それが心の意識に開示されて明瞭な直観をもたらすに違いない⁽³⁴⁾と考えられるゆえんである。したがって、人間にとって靈界とは「天」という言葉が表わしているような上方にあるのでも、また死後に赴く処でもない。かえって人間の心は本来、この世の生活においても、靈界のすべての非物質的本性と解き難く結ばれた共同関係（靈的共同体）のうちにあるのである。なぜならば、「そのような非物質的全体〔靈界〕は、物体的事物に対する遠近によってではなく、それ自体の諸部分〔個々の靈的本性〕相互間の靈的結合において表象されなければならないからであり、少なくとも靈界の成員はそのような関係によってのみ自己自身を意識しているからである⁽³⁵⁾。

ところで、このような見方はとくにカント倫理学成立史という観点からみて、注目すべきものであると思われる。人間は同時に二つの世界の成員であり、物質的世界においてはニュートン力学の機械的法則に従うが、非物質的世界においては靈的本性との共同関係（靈的共同体）のうちにあるとされた。ところがその場合、人間の第二の靈的在り方というものは第一の物質的在り方とは根本的に異なり、物体的事物を媒体としないがゆえに決して人間の經驗的・理論的認識の対象とはなりえず、倫理的実践においてのみ実現されるものであることは、容易に洞察されうるであろう⁽³⁶⁾。『視靈者の夢』の先に挙げた箇所⁽³⁷⁾で非物質的世界が mundus intelligibilis（可想界）という語で置き換えられていることは、まことに暗示的である。この時期のカントの思索がもしそのような方向をとったとすれば、青年カントの思想的・学問的基盤をなしていたライプニッツ・ヴォルフ的な合理論的体系の整合性を内側から突破するような仕方で、実践の形而上学としての

倫理学が理論の形而上学から独立した別箇の課題として芽生え、生成していくのは、当然のなりゆきとして理解することができる。そしてこのような思索の方向は、むろん幾多の曲折を経るにもせよ後年の理性批判へと発展する萌芽を宿していると思われるのである。しかしそれはともかくとして本論に立ち返らねばならない。

超越論的意識に現われてくる諸世界に関して最も注目すべき点は、それぞれの世界の素材（物質、霊、生命）の違いを越えて、それらの素材を世界へと構成する力ないし作用の共通な形式（引力↔斥力、愛↔尊敬、美↔崇高）が観取されていることである。それは理性の自己認識に他ならない。このような理性の形式の普遍性によって、両極性克服の試みがなされているのである。つまり、結合の原理と反撥の原理との相互作用による動的統合である。（第2図参照）。

	構成要素(素材)	構成原理(形式)
物質的世界 ↓	物質	機械的作用法則 (引力↔斥力)
生命的世界 ↑	生命(物質+霊) (人間的生命=心)	有機的作用法則 (人間的生命の場合：美↔崇高)
非物質的世界	霊	霊的作用法則 (愛↔尊敬)

〔第 2 図〕

カントの思索は徹頭徹尾この宇宙論的な両極性の振動に貫かれており、後年の歴史哲学における人間社会の形成原理としての有名な *die ungesellige Geselligkeit*⁽³⁸⁾（非社交的社交性）という概念は、それに対応する経験的レベルでの事象把握の一例にすぎない。しかし残念ながら、ここから生じてくる重要な諸帰結を論ずる余地は、この小論に与えられていない。

5.

最後に、カントが直視している人間界の両極性というものが、今日もなお克服されえぬ究極の謎として、われわれの前につきつけられていることを示す一例を挙げておこう。フロイトは死の直前に執筆した『精神分析学概論』⁽³⁹⁾(1938)において、精神分析学の根本前提なるものを次のように要約している。「われわれが心的なもの(心情生活)とよんでいるものに関しては二種の知見がえられている。ひとつは身体器官で、心的なものの舞台すなわち脳髓(神経系統)であり、もうひとつは直接的な所与としてあるものであり、いかなる記述によってもその委細をつくすことができない意識作用である。この両者の間に介在するものはまったく未知であり、われわれの知識のこの二つの極点の間の直接関係はあたえられていない。⁽⁴⁰⁾」このいささかそっけない散文的表現の意味するものが百五十年前に「わが頭上に煌めく星天とわが内なる道徳法則」に象徴化された二つの極点をめぐってカントの思索が置かれていた事情から一步も出ていないことは論をまたない。フロイトはこれら二つの極点の間に拡がっている闇を Unbewußtsein(無意識)と呼んで敢然とその探検に赴いたのであるが、それはかつてカントが孤独な思索の旅を敢行したまさしくその領野に他ならなかった。ただ、十九世紀の自然科学的な方法とカテゴリーに固執したフロイトは、機械論的な Libido 一元論から容易に抜け出すことができず、Eros と Thanatos という一種の両極性原理に到達したのは晩年に至ってからであった。それと対照的にカントは早くから両極性思考の振子運動に耐えながら悪戦苦闘の末、生涯の終り近くにようやく自己の哲学体系の構築によってはじめて危機をのりきり、「約束の地カナン」に一步近づくことができたかに思われたのであった……が、しかしそこにおいてかれ畢生の問題は本当に解決を見たのであろうか？

(本稿は慶応義塾学事振興資金の補助による研究の一部である。)

〔注〕

- (1) 《Allgemeine Naturgeschichte und Theorie des Himmels》(1755), Kants Werke (Akademie Ausgabe) Bd. I (以下, 巻数のみ記す), ss. 215-368. 本稿では『宇宙論』と略記する. なお, 邦訳理想社版カント全集を随時参照したが, 引用した箇所の記事語は必ずしもこれに従っていない.
- (2) Kant: I, S. 230.
- (3) Ibid. S. 221.
- (4) Ibid. a. a. 0.
- (5) Ibid. a. a. 0.
- (6) Ibid. SS. 222-225.
- (7) Hinske, N.: Kants Weg zur Transzendentalphilosophie, Stuttgart, 1970, S. 85.
- (8) Vgl. Cassirer, E.: Kants Leben und Lehre, Berlin, 1921, 1. Kap.
- (9) Kant: I, S. 363.
- (10) 〈Versuch von der Verfassung und dem mechanischen Ursprunge des ganzen Weltgebäudes nach Newtonischen Grundsätzen abgehandelt.〉
- (11) 若きカントのこのような企ては, 批判期にみられるような, 信仰の可能性を確保するために認識能力を制限するという考え方 (『純粋理性批判』第二版序文 BXXX) とは, 一見正反対のものであるように思われる. しかし実際には, ここで企てられたような方向の徹底的追求から生じた独断的・合理論的立場の危機から, はじめて「理性批判」および独自の「実践の形而上学」の構想が誕生したことは, 後に述べるとおりである (本稿60-61ページ参照).
- (12) Kant: I, S. 230.
- (13) Ibid. S. 246.
- (14) Ibid. S. 228.
- (15) Ibid. a. a. 0. 引用箇所における [] 内は筆者 (以下同様).
- (16) Ibid. S. 367.
- (17) 本稿 57-58 ページ参照.
- (18) Kant: I, S. 235-236.
- (19) Ibid. S. 367.
- (20) Hinske: op. cit., a. a. 0.
- (21) Kant: III, S. 324-327.
- (22) Ibid. S. 327-328.

- (23) Ibid. S. 323.
- (24) Hazard, P.: *La Crise de la Conscience européenne (1680-1715)*, 1935.
野沢協訳『ヨーロッパ精神の危機』(法政大学出版局) 参照.
- (25) Koyré, A.: *From The Closed World to the Infinite Universe*, 1957.
野沢協訳『コスモスの崩壊』(白水社) 参照.
- (26) Vaihinger, H.: *Kant als Melancholiker*, *Kant-Studien* Bd. 2, 1898.
- (27) ボロウスキー, ヤッハマン, ヴァジャンスキー 共著『カント その人と生涯』
(芝罘訳, 創元社) 等を参照.
- (28) 《*Träume eines Geistersehers, erläutert durch Träume der Metaphysik.*》(1766), *Akademie Ausgabe* Bd. II, S. 315-373.
- (29) Kant: VII, S. 227.
- (30) Kant: I, S. 359.
- (31) Ibid. S. 366.
- (32) Ibid. a. a. 0.
- (33) Ibid. S. 366-367.
- (34) Kant: II, S. 332.
- (35) Ibid. a. a. 0.
- (36) Vgl. Ibid. S. 336.
- (37) Ibid. S. 329.
- (38) Kant: VIII, S. 20.
- (39) Freud, S. 《*Abriß der Psychoanalyse*》(1938).
- (40) 懸田克躬訳, 平凡社『世界教養全集33』274ページ (傍点筆者).

〔その他の主要参考文献〕

- Menzer, P.: *Der Entwicklungsgang der Kantischen Ethik in den Jahren 1760-1785*, *Kant-Studien* Bd. 2 SS. 290-322., Bd. 3 SS. 41-104., 1897-98.
- Menzer, P.: *Kants Lehre von der Entwicklung in Natur und Geschichte*, 1911.
- Ward, K.: *The Development of Kant's View of Ethics*, 1972.
- 深作守文「カント倫理学成立史考」(都立大学人文学部哲学科編『哲学誌』4, 1961所収)
- 浜田義文『若きカントの思想形成』(勁草書房) 1967.
- 坂部 恵『理性の不安』(勁草書房) 1976.
- E. カッシーラー『啓蒙主義の哲学』(中野好之訳, 紀伊国屋書店) 1962.